

古流剣術はその流派ごとに独特の術理や技術体系、哲理などを生み出し、今日に到っています。その最も象徴的とも言えるのが、各流派ごとに考案された木刀や袋竹刀（古くは撓と書いた）、防具などの稽古道具です。

おそらく、初めて古流剣術に接してみて不思議に思われるのは、稽古に用いる木刀や竹刀が流派によって形状や寸法がことごとく違っていて、統一性が全くないことではないでしょうか。同じ日本刀を使う技術でありながら、これは大変に興味深いことと言えます。

このような現象はなぜ起きたのでしょうか。先ず、江戸時代には今のような武道具の業者などは存在しませんから、真剣や刃引きを別にすれば、稽古に使う道具は、その流派で求められる形状のものを個人または道場で自製していたのであり、その時の形状を踏襲しているからに他なりません。今でもそのようにして自製している流派は珍しくありません。つまり、統一された規格品は最初から存在しなかったのです。今日最も目にすることの多い規格品の木刀は、おそらくは北辰一刀流で使われていた木刀が原型ではないかと思われます。

それでは、なぜ木刀の形状が流派によって違うのでしょうか。それは簡単に言えば、流派によって技に対する概念が全く異なっているからなのです。木刀はそもそも、真剣の代用品として考案されたものですが、通常の剣道の稽古で使われる、規格品の木刀よりも重く作ってある場合が多いのは、真剣の重量（軽いものでも1kg近くはあります）に近くしてあるからなのです。そして、真剣に於ける攻防を前提とする点では、現代剣道とはそのあり方に決定的な相違があるのです。剣道における竹刀の攻防を見慣れた目には、おそらくは古流の組太刀は遅く感じられると思います。しかし古流の組太刀では、構えた状態から最短距離の標的を最小の動きで斬る事を主眼にしているので、実際にはきわめて速いのです。つまり古流剣術は、棒で叩くような感覚で捉えると、本質を見誤ってしまうのです。これについては長くなるので、順を追って説明してゆきたいと思いますが、それによって古流剣術の妙味の一端を知って頂ければ幸いです。